

「“霊” が鳩のように」

イエスが洗礼を受ける場面はとても簡潔に描かれます。その中で「天が裂けて」（マルコによる福音書 1:10）という言葉が浮かび上がってきます。天が裂けたらどうなるのでしょうか。「パンドラの箱」のように、ありとあらゆる厄災が降りかかってくるということも想像されるでしょう。もちろん、そこには「希望」も残っているので、一概に「全てが良くない」とは言い切れませんが、天から降ってくるのが神の裁きだとするといささかいただけません。

一方、「裂ける」「分かれる」という言葉にはポジティブな意味もネガティブな意味もあります。聖書の中では、例えば創世記のアブラハム物語の中で、神が契約を結ぶ場面に「煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた」（創世記 15:17）とあります。神が献げられた動物の間を通って臨在されるイメージです。また、出エジプト記では、「主はモーセに言われた。『……杖を高く上げ、手を海に向かって差し伸べて、海を二つに分けなさい。そうすれば、イスラエルの民は海の中の乾いた所を通ることができる』（出エジプト記 14:15-16）と、二つに分けられた海の間を、イスラエルの民が神と共に無事に通過するイメージが描かれます。いずれも、開かれた間を「良いもの」が通って行くという、ポジティブな意味が強調されているように読めます。

そして、詩人は「主よ、あなたの慈しみは天に／あなたの真実は大空に満ちている」（詩編 36:6）と歌っています。天には神の慈しみが、神の真実が満ちている、と。ということは、この場面で天が裂けることは、決して悪い意味ではなくなります。イエスが洗礼を受けられた時、天が裂けて神の恵みが溢れ出してイエスに注ぎかけられました。それが「“霊” が鳩のように御自分に降って来る」（マルコによる福音書 1:10）ということです。洗礼者ヨハネが「わたしよりも優れた方が、後から来られる」（マルコによる福音書 1:7）と言った方こそ、イエスであるとの証しでした（「この方は、水と血を通して来られた方、イエス・キリストです。……そして、“霊”はこのことを証しする方です。“霊”は真理だからです。」ヨハネの手紙一 5:6）。

神が「あなたはわたしの愛する子」（マルコによる福音書 1:11）と呼びかけられたように、洗礼には祝福が伴っています。それは、私たちが受ける洗礼も同じです。神と共に生きる決意をしたその決断を、神は祝福してください。しかし同時に、私たちは神と共に歩む道が平坦ではないという事実を突きつけられるのです。イエス自身ですら、「この杯をわたしから取りのけてください」（マルコによる福音書 14:36）と祈られるほど、神の道は喜びと共に厳しさを含んでいます。神の救いを、神の平和を実現することは本当に困難です。それでもイエスはその道を歩むことを選びました。

2025年の連続テレビドラマで一番視聴率が高かったのはTBSで放送された『ザ・ロイヤルファミリー』だったそうです。競馬にまつわる、競走馬の馬主とその家族、関係者を中心とした（もちろん、馬も）大きな物語が描き出されていました。その中で、印象に残った場面があります。親から子へ、夢が継承されるというテーマが描かれていたのですが、主人公の一人が「伝統」や「継承」はある意味での「縛り」や「不自由」という窮屈さになってしまっていないかと指摘されます。そこで、彼は「継承は押し付けられるものじゃない。選び取るものなんだよ。受け取る人間の数だけ、受け継ぐものがある。俺は、望んで夢を受け取って、自分のものにしたんだよ」と切り返すのです。

命じられたからその通りに生きるものではありません。同じ夢を見て、その目標に向かって自分なりに一歩を踏み出す。自分の代では完成しないかもしれないその究極の目標に向かって、自分にできる精一杯を続けていく。そして、可能な限り次の代へとその夢を継承し続けていくことが大切なのだ、と。

洗礼を通して、また礼拝を通して、私たちにも「“霊” が鳩のように」注ぎ続けられています。その恵みを継承する私たちでありたい。そして、その恵みを生かす私たちでありたいと心から願います。

